特集

普通ってなんだろう

STIR Vol.08

Contents

Interview 001. 特集 普通ってなんだろう 生きる意味がきっとある 02 ファッションモデル・タレント　佐藤かよ

Interview 002. 特集 音楽は、そこにあるだけでハッピーになれるもの 06 インストゥルメンタル・バンド　Nabowa（ナボワ）

Interview 003. 08 株式会社NSP　就労継続支援B型事務所 キングコング　専務取締役／仲地宗幸

Interview 004. 10 アパリ法律事務所 代表弁護士／平林剛

Interview 005. 12 NPO法人ノーベル 代表理事／高亜希

Interview 006. 14 中山心療クリニック 就労支援担当　精神保健福祉士／横山泰三

Interview 007. 16 株式会社ライフ・シンセリティ　就労継続支援B型事業所 福祉事業型「職業訓練校」カレッジ・アンコラージュ 代表取締役／岡田英之

Interview 008. 18 株式会社フェアスタート　NPO法人フェアスタートサポート 代表取締役社長　代表理事／永岡鉄平

Interview 009. 18 日本ハウズイング株式会社　人事総務部　人事グループ 課長　櫻井善文

Interview 010. 19 ぜんち共済株式会社 代表取締役社長／榎本重秋

Interview 011. 20 特定非営利活動法人風雷社中 代表／中村和利

22 モノ＋ヒト[手しごと〜ぬくもりの輪・和・話] 手しごとの会運営委員会

24 社会福祉法人トゥムヌイ福祉会　障害者就労支援施設イノー Café　vinca（カフェ　ヴィンカ）

25 働くお悩み相談室・おすすめメディア紹介コーナー

26 News&Information

セクシュアリティによって差別されない社会へ。

Letibee
代表取締役
外山雄太
Yuta Toyama

2012年、同性カップルの結婚式サポートや法的保障の必要性を感じ、共同代表の林康紀氏とともに設立。「セクシュアリティに関わらず、すべての人が自由に幸せを追求できる社会を実現する」をミッションに掲げ、日本におけるLGBT市場醸成のための活動をおこなう。

同性パートナーと生きていく。

セクシュアルマイノリティ、いわゆる性的少数者の人口は、人口全体の5.2%〜10%におよぶといわれています。心と体の性が一致していないトランスジェンダーの方や、同性愛者など、体・心・性的指向において少数派だといわれている人を指すのですが、その数字からわかる人口の割合は決して少ないとはいえません。左利きの人と同じ割合だといわれているのです。そのような状況の中、私たちは同性カップルが生きていく上で必要な法的制度に関する部分のサポートをしています。現在、日本において同性カップルの婚姻は認められていません。そのため、同性カップルがパートナーとして生きていく上でどうしても直面してしまう問題が多くあるのです。例えば、同居する賃貸住宅を探すのも容易ではありませんし、住宅ローンを2人で組むことはできません。また、生命保険の受取人をパートナーに指定することも基本的には難しく、相続関係を結ぶことも困難といわれています。同性カップルが当たり前に人生を共に生きていきたい、そう願うのはごく自然なことなのですが、直面する問題はあまりにも大きな悩みとなってのしかかります。

しかし、それらの解決が難しいと思われている問題でも、これから生きていくパートナー同士で事前に予想し、対策を講じることはできるのです。私たちは専門の行政書士の方に協力を仰ぎ、任意後見制度や公正証書の作成など、法律の上で保障のある方法をご提案します。

また、Letibeeのサービスとして、同性カップルのウエディング支援も提供しています。それは結婚式のプランニング全般、会場準備や当日までのあらゆる相談ごとに応じてサポートをするサービスですが、結婚式の相談に訪れたカップルに、これから先のライフプランに応じた問題解決もご提案しています。同性カップルがパートナーとして生きていくうえで得ることが難しいといわれている『法的保障』。私たちはこれが重要だと考えているのです。

セクシャルマイノリティとビジネス。

企業などに対しても研修を実施しています。日本はまだまだセクシュアルマイノリティに対しての人権意識が低く、世界的に遅れた人権後進国といわれています。なぜダイバーシティが日本に必要なのか、そして具体的にセクシュアルマイノリティの人たちがどういう人たちなのかを知ってもらうことが目的です。ダイバーシティの進んでいる組織は強いともいわれていますし、欧米諸国ではLGBTsマーケットが非常に注目されていますが、人権意識の上に成り立つLGBTsに関わる市場は現在の日本ではまだまだ潜在的なものです。そのため、私たちは人権意識とともに市場の開拓をし、企業や一般のカスタマーにもアプローチをしていきます。一般の方向けのイベントとして、ビジネスミートアップというイベントもスタートしました。何かしたいけど、何をしたらいいのかわからない、という方のためのイベントとして、ビジネスで社会問題にアプローチすることに興味をもってもらえる日になってもらえたらと思います。そして、それらの活動を通じて、大きなマーケットを生みだすと同時に、セクシュアルマイノリティに関する社会問題を解決していきたいと思っています。

全ての人に人生の選択を。

同性カップルやセクシュアルマイノリティに限らず全ての人にいえることですが、生きるうえでの選択が自由にできない状況があるならば、それは解決すべき問題だと思っています。同性カップルの当事者であってもその多くが問題を認識していないのが現状です。私たちは自分たちの正義を振りかざすつもりはありません。さまざまな情報が氾濫する社会で、正しいと思えることを選択でき、かつ自分自身の幸せを自由に追求することのできる社会が望ましいと考えています。そうした社会を実現するために、これからも邁進していきます。

特集2

GoodJob! Center（センター） 建設プロジェクト in 奈良県香芝市

2016年春、障害のある人とともに社会に新しい仕事をつくりだすことを目指す場所、「Good Job!センター」が建設されます。

Good Job! センターがめざす、3つの方向性

1 アート×デザインによる新しい仕事の創出

2 異分野をつなぐプラットフォームの構築

3 所得の再分配から可能性の再分配へ

こんな機能のある場所！

アトリエ・ラボ・作業室

表現やものづくりに関心のある人は誰でも参加できる場。その場にいる人たちと自由な発想でものづくりに取り組みます。

流通センター

全国の福祉施設や企業と連携して生まれた質の高い商品や作品の流通の拠点です。奈良から全国・世界へお届けします。

ギャラリー、カフェ

表現やデザインの発表の場、憩い・交流の場として、さまざまな人が利用できます。サロンやイベントの会場となることも。

センター内にラボを併設。ここには企業や研究機関、デザイナーなどと共同開発をすすめるための工房的な設備を導入し、プロダクトの開発や、障害のある人のはたらき方・企業就労環境における多様性の研究などを行います。

Interview 002.

アート・デザイン・福祉・ビジネスの拠点

社会福祉法人わたぼうしの会

たんぽぽの家

（奈良県奈良市）

1973年、奈良たんぽぽの会発足。音楽やアートを通して誰もが生きがいをもつための活動を展開し、1987年には社会福祉法人わたぼうしの会設立。生活介護事業や就労継続支援B型事業、相談支援や生活支援など幅広く障害のある方の生活をサポートする事業を運営。

統括施設長

成田修

Osamu Narita

Good Job! プロジェクト始動

1995年、財団法人たんぽぽの家は、それまで価値が低いとされてきた“障害のある人のアート”を新しい視座でとらえ直す新しい市民芸術運動「エイブル・アート・ムーブメント」を始動、障害のある人の能力を高め、社会的イメージを高める活動に取り組んできました。しかし、あくまでも一般的にいえば、障害のある人の所得は低い傾向にあり、単純労働や生産性の低い労働など選択肢が少ない状況にあり、“はたらきがい”や“いきがい”といった労働の尊厳が感じられないという課題があります。この状況を打破すべく、”既存の労働観“にとらわれることなく、障害のある人たちのもつ力の可能性を最大限生かせるような仕事・はたらき方の仕組みをつくることを目的に、2012年度からGood Job!プロジェクトがスタートしました。

2012年度には大阪で初の「Good Job!展」を開催、障害のある人とその周辺から生まれつつある魅力的なプロダクトやはたらき方を紹介してきました。今年度で4回目の開催となります。反響は年々高まっており、各地の企業や地場産業、デザイナー、福祉施設などと連携して、こういったプロダクトや仕組みを事業化することに大きな可能性を感じていました。そんな折、たんぽぽの家設立当初からご支援をいただいていた大阪市在住の吉本さんから、奈良県の香芝市にある土地をご寄付いただけるというお話をいただき、この機会にぜひ香芝において「Good Job!プロジェクト」が事業化できれば、とのおもいでGood Job!センター構想がスタートしました。

香芝市から日本の未来を描く

建設場所である、奈良県香芝市という場所。吉本さんから先祖代々受け継ぐ大事な土地がこの場所であったこと、またこの場所でGood Job!センター建設が進められていることにはとても大きな意味があると思います。香芝市の周辺には優れた伝統産業・地場産業を支える企業が多くあり、そういった企業は、従来の中央集権的な流れだけではなく、地域に根ざしながら、その優れた技術や独自性を、直接世界にPRしていけるような時代に入っています。また、香芝市は、大阪のベッドタウンとして住宅地の造成などがすすんでおり、これからも人口増加が続く地域と目されている一方で、都市圏では見え難かった、高齢者や障害のある人のケアや暮らし方など、課題も明確に見えてきています。日本における未来の地域像を描く場所としても、絶好のロケーションなのです。今回のGood Job!センター建設は、そのような幸運の巡り合わせにも支えられています。

Good Job! プロジェクトがめざす社会

たんぽぽの家では、これまで多様な人との関わりあいのなかで、障害のある人のさまざまな表現活動を支援してきました。今回のプロジェクトであるGood Job!センターでも、障害のある人、企業、地域の方々といった、多様な人の関わり合いのなかで、さまざまな表現活動やワークショップなどのプログラムを行います。そのなかで、和気あいあいとしながら、豊かなはたらき方と人生の過ごし方をみんなで一緒に考えていきたい、というのが第一にあります。また、こういったアート的な活動の他に、より就労向けのプログラムを通して、障害のある人の表現からうまれた魅力的なプロダクトの製造や、その流通作業を行います。そういった仕事は、ある意味「プロ意識」が必要とされるものですので、厳しい面があるかもしれません。その厳しさの分だけ、そういった仕事に従事する人の表情には、楽しさだけではなく、真剣な表情や集中している表情など、より緊張感があらわれてくるのかもしれません。そういった責任を伴う仕事に従事することを通してはじめて、その人のなかに社会のなかにおける自分の存在意義、労働の喜びや自尊心といった感情が育まれていくのではないでしょうか。

Good Job! センター
開設準備室

藤村和成
Kazunari Fujimura

Good Job!センターは、アート・デザイン・福祉・ビジネスの拠点です。障害のある人とともに、社会に新しい仕事をつくりだすことをめざしています。個人、企業、地域の垣根を越えて、一人ひとりが能力を発揮できる社会の実現に向けて、さらなる提案・実践を展開していきます。

このプロジェクトは、個人・団体問わず多方面の篤志家・専門家の方々から多大なご支援・ご協力をいただいています。本当に感謝してもしきれない、というのが正直なところです。このご恩は、Good Job!センターでの事業を推進するなかで、障害のある人たちとともにはたらき、ともに社会貢献的な事業を行うことでお返ししていければと思っています。その一方で、ご協力いただいている方々や今後ご協力いただくことになる方々は、敢えて厚かましい言い方をさせてもらえば、「一緒にGood Job!プロジェクトを推進していく仲間」という風にも考えています。こういった強力な仲間たちとともに、多様な関わり合いのなかで、Good Job!プロジェクトがめざす社会を一緒につくっていけたらと思います。

戦争によって私に託された土地　障害福祉の未来に役立てたい

戦争が日本の歴史を変えた

昭和16年、太平洋戦争が勃発し、私たち家族が住んでいた地域は大阪大空襲によって全てが焼けて無くなりました。日本では本当に多くの人々が戦争で命を落としたのです。私の母方の祖父母は、私の叔父にあたる一人息子のためにと約1,300坪の土地をもっていましたが、その叔父は太平洋戦争中、ニューギニアで戦死しました。その後祖父母も亡くなり、土地だけが残ったのです。3歳で発症した難病により、81歳になる現在まで障害者として生きてきた私は、この土地を障害福祉のために活用しようと決めていました。今日まで随分と長い年月の間、その願いが叶わず時期を待っておりましたが、たんぽぽの家とは草創期からのお付き合いであり、障害福祉の未来に期待を寄せることのできる皆さんだと思っておりましたので、今回のプロジェクトが始まるならばこの土地を寄付しようと決めたのです。今の日本が平和であるからこそ、障害福祉も進化します。ぜひ、このプロジェクトを成功させ、戦争によって私に受け継がれたこの土地を障害福祉の未来のために役立ててほしいと思っています。

吉本昭
Akira Yoshimoto

昭和9年生まれ、大阪市此花区出身。3歳で難病脊椎カリエスを発症し、車いすを常用しての生活を送る。Good Job!センター建設にあたっては、プロジェクトに障害福祉の未来への可能性を感じ、建設用地を寄付した。

ここは、いろんな人が共存できる場所

一級建築士事務所　大西麻貴＋百田有希

o + h
（東京都中央区）

大学時代より活動を開始し、現在の事務所を協同主宰。住宅・商業施設・図書館・オフィスなど幅広い建築デザインを手がける。

百田有希
Yuki Hyakuda

1982年生まれ。京都大学建築学科卒業、京都大学大学院修士課程修了。2014年まで伊東豊雄建築設計事務所に勤務。

大西麻貴
Maki Onishi

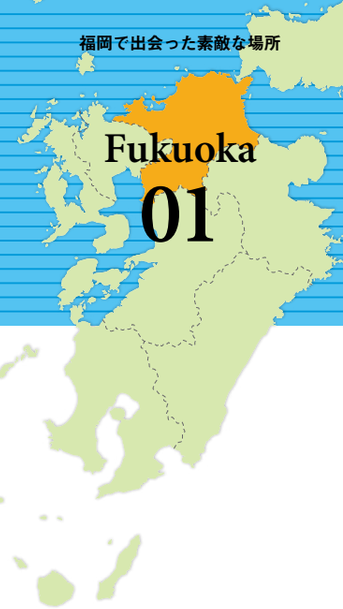
1983年生まれ。京都大学建築学科卒業、東京大学大学院修士課程修了。2013年京都精華大学客員教授、名古屋芸術大学特別客員教授、2013年より横浜国立大学、法政大学非常勤講師を務める。

心地よい感覚の森

Good Job！センターは設計者をコンペティションによって広く募集しており、私たちの提案が選ばれたことをきっかけに建築設計に携わることになりました。コンペに応募するにあたって障害福祉についてほとんど知識のなかった私たちは、まずたんぽぽの家のアトリエを見学するところからスタートしました。そこでは活動するメンバーの方々がそれぞれの感性で活動をし、一人で黙々と作業をすることが得意な方、誰かの隣にいることで集中することができる方、本当にいろいろなスタイルがある様子が印象的でした。その様子を見て、「適度な距離感があり、一人ひとり違うように見えているけど実は心地よい感覚で繋がっている空間」を作りたいと感じました。試行錯誤の結果コンペで提案したデザインは、壁柱を使って暗い場所や明るい場所をうまく配置し、「森」をイメージしたものでした。設計を担当することが決まってからはデザインを何度も練り直し、現在やっと最終段階に入っています。Good Job！センターの大きな役割は、障害のある方とともに新しい仕事をつくりだすこと。ものづくりをするスタジオや倉庫の他に、新しいアイデアが生まれる場所としてミーティングスペースや、地域の方が利用できるカフェやギャラリーもできる予定です。エントランスから建物の中に進むと、違ったシーンが楽しめるようたくさんの工夫を凝らしました。

個性を尊重する空間作り

今までに無かった場所を作っているという実感があります。その分、新しい空間を求められていると感じますし、地域の方との関わりや、障害の有無に関係なく誰にでも居場所があるとはどういうことだろう、と考えながら設計しました。オシャレに興味のある若者や普段着のままの近所の方など、いろいろな方が自由に共存できる空間作りが大きなテーマとなっています。スタッフもメンバーの方々も関係なく、いろんな人がいる場所になってほしいのです。障害のある方もそうでない方も、一人ひとりの個性を尊重しながら自然とともにいられる空間を目指すことが、私たちのこのプロジェクトでの役割なのではないかと思っています。



Fukuoka
01

施設から地域へ。

日本に残るやさしさを福祉に活かす。

社会福祉法人明日へ向かって
（福岡県福岡市）

主宰
末松忠弘
Tadahiro Suematsu

16年ほど前に無認可作業所を引き継ぎ、平成13年に社会福祉法人格を取得。就労継続支援B型事業・生活介護事業・就労移行支援など、幅広く障害のある方の支援に関わる事業を運営。経済誌の記者を務めた経験や、幼いころから多様な友人と過ごした経験を活かし、福岡市内を中心に精力的な活動をしている。

憤りを感じたボランティアキャンプ

学 生時代、障害のある子どもたちとのキャンプに参加する機会がありました。そこには、多くの学校からボランティアが参加しており、とても張り切って動いている。それが、子どもたちに何が出来て何が出来ないかを確認せず、全てをお世話してあげるという風潮に感じられました。私が育った環境が幼少の頃から周囲に障害のある友人知人と共に過ごしていたこともあり、そのボランティアの様子に憤りを感じたのです。このままではいけない、と思い立ち、各大学にあるボランティアサークルを訪問して意見交換の場をつくり、福祉推進ボランティア協会を作ったのです。そこではボランティアスタッフの派遣の他、さまざまなアウトドアイベントを企画し、親の会や施設、企業などと連携する経験となりました。それは現在の活動にも通じていると思います。

生活とは、企業との関わりで成り立つ

大学卒業後は、編集社で経済誌の記者をしていました。それは、まず障害のある方の生活をより良くしていくには、企業へのアプローチが必ず必要だと考えたからです。例えば朝起きてバスに乗るにはバス会社との関わりが必要ですし、買い物でコンビニに行くことでもそう。全ては企業との関わりで生活は成り立ちます。また、障害のある方の就労についても企業や社会の理解は必要だと思い、記者の仕事を通じて1000社以上の企業と関わりをもちました。

福祉施設も商売のプロである企業ともっと関わることによって、質を上げていかないといけない。その考えから当法人では利用者一人ひとりの力をしっかり活かせる環境を作り、現在は年間約8000万円の売り上げを上げることが出来ています。

地域での生活を目指して

一方、地域で生活していくためには所得の保障だけでなく、生活そのものの支援も大切で、より重度の方ほど注力していく必要があります。「通所施設は、平日に仕事をするための場所とは考えない。地域生活と社会参加の拠点」という職員の意識改革を行いました。常勤の大半が通所サービスだけでなく、ホームヘルプやガイドヘルプ、ショートステイも兼務しています。ショートステイは、どんなに緊急でも、絶対に断らない方針を貫いています。今、年に一カ所、グループホームを開設しており、今後は一人ひとりの嗜好や個性を大切にした住まいをつくっていきたいと考えています。

日本人の気質、やさしさが活きる福祉に

ここ数年、福祉先進国といわれているヨーロッパでの福祉を見てきました。高負担高福祉におけるサービスの厚みに圧倒されつつ、一方では重度障害者に対する就労支援の考え方は感じられず、介護か雇用か、どちらかの選択しかないように思いました。また、国によっては、成年後見人制度が整っていることによって当事者の意見よりも制度や代理人で物事が進んでおり、本人の意思の尊重が弱いようにも捉えられました。最大の関心事は、アールブリュット(生の芸術)で、ヨーロッパで取り上げられるのは精神障害者の作品ばかりであるのに対し、日本は知的障害者の作品も多い。制度が整っている海外の現状を見ることによって、今の日本にある福祉には制度に頼りすぎない日本独特のやさしさがあり、伝統的な気質が残った福祉の文化があるともいえるのではないか、と感じました。これらは今後、私自身の研究テーマとして考えていこうと思っています。